

ブラジルでの熱帯養蜂会議 「ミツバチ生産物の医学的研究」 シンポジウム

松香 光夫

2004年9月6日～10日に第8回IBRA国際熱帯養蜂会議が、ブラジル・サンパウロ州立大学(USP)の一つがあるリベイロン・プレトにて行われた(図1)。この会議はイギリスに本部のあるIBRAが主催して、4年に1回開かれており、前回はアジア養蜂研究協会と合同で、タイ・チェンマイにて開かれたものである。今回は、ブラジル国内の養蜂会議と合同で開催された。熱帯養蜂ということで、日本には馴染みが薄いですが、日本とブラジルの関係から、プロポリスを中心に生産物を扱ってはどうかとIBRAに提案したのがきっかけで、会議の主体となる14あるシンポジウムの一つを「ミツバチ生産物の医学的研究」と題して、仕切ることになった。その内容については、紙幅の関係もあり、またプロポリス研究者協会の会報(松香, 2004)を参照いただくとして簡単にとどめ(必要ならご連絡)、ここでは周辺の事情などを含めて報告したい。

ブラジルの養蜂とミツバチ

ブラジルの養蜂については、最近のAm. Bee J.誌にフロリダ大学のSanford博士が要領よくまとめた記事(Sanford, 2004)があるので、参照していただきたい。

ブラジルの養蜂は、1830年代にヨーロッパから持ち込まれた。1956年にE. Kerr博士が熱帯で働く蜂に改良しようとアフリカ蜂(*Apis mellifera scutellata*)を持ち込む前には年産400t程度だったという。持ち込まれたミツバチが逃げ出して、ブラジル蜂となったのは有名な話である。大変に荒い蜂となり、しばらくはカオス状態だったが、1970年に第1回の養蜂



図1 開会式の様子

会議が開かれたのが、復調の兆しであった。例えばサンパウロ養蜂組合(アパカメ)は25周年を迎え、5000部の発行をとげている。ハチミツ生産量は4万t程度といわれている。

ここでブラジル蜂と書いたが、今はAfricanized honey beeと呼ばれているので、私たちはこれを「アフリカ蜂化ミツバチ」と訳している。この蜂は一時「キラビー(殺人蜂)」などと呼ばれたこともある大変に荒い性質をもっていた。私が1977年にカリフォルニア大学デービス校のN. Gary教授を訪ねたところ、同教授はその頃の話映画「Killer bees」にミツバチに襲われて、刺されて死ぬトラック運転手の役で出演した時で、こういう役は映画俳優にはできないからね、と言っておられたのが印象的である。その頃、ブラジルの隣国パラグアイからの要請で、竹内一男(現)教授、続いて吉田忠晴(現)教授が玉川大学から派遣され、荒いミツバチの改良を通して同国の養蜂振興に貢献されたのである。一方で、この蜂はプロポリスをよく集め、今ではブラジルの養蜂の一面を支えているのだと思う。宇宙服のような頑丈な養蜂服を着て、内検をするのだが(図2)、今回見せてもらったときには、服は着るものの、素手で扱っており、おとなしくなった(改良された?)ことを実感した。

この蜂は違う種どうしの掛け合わせではなく、同じセイヨウミツバチの内部で起こした交雑であるから、この蜂は生物学的に「雑種」ではないことを強調しておきたい。あえて言えば、亜種間交雑系統」ということになるだろうか。現代では、このような品種改良は外来遺伝子の導入として問題になることは確かであるが。



図2 防護服に身を包みおそるおそる巣板をもち上げる筆者



図3 ハリナシバチの一種の巣箱内部

サンパウロ大学と会議の様子

USP リベイロン・プレトは、Kerr 博士が活躍した拠点で、現在でも十指に余る蜂の研究者が集う拠点であるが、ミツバチ以外の蜂の研究が盛んで、特にハリナシバチが、よく知られている(図3)。会議の中日に当たる9月8日は遠足研修日。やはりハリナシバチを訪ねるツアーが一番人気で、乗り損ねてしまったので、学内見学コースに加えてもらった。

大学のハチ関係の歴史の説明から始まったが、なかまにはミツバチの専門家はいないと強調されたのが印象に残った。その後構内を回り、木の洞を中心に色々なところに、番号札の付いたハリナシバチの巣がマッピングされており、そのいくつかを訪ねた。直接ハリナシバチに関心をもっているわけではない私としては、十分な研修になったと言える。

会議自体は、近くの(といってもかなり不便な立地の)リゾートホテルを会場にして、缶詰状態で行われた。14のシンポジウムが主体で、一般講演がない代わりにポスター発表があっ

て、前後2回、かなりのスペースで、盛りだくさんだった。USPの大学院生などを含む若手研究者の活躍が目立った発表であった。

最終日にイギリス・ウェールズ大のCooper博士を共同世話人として組んだシンポジウム「ミツバチ生産物の医学的研究」では、結果的に、ハチミツが2題、プロポリスが2題、ハチ毒の計5題で行うことになった。実質的には、5題でも時間が足りない状況であった。

熱帯養蜂会議ではこれまでアピセラピーをあつかったことがないので、これでよかったのかと思うが、最終日に終わってみればホッとして、会場を後に帰国した。

国際交流

地球の反対側での会議であったが、いくつか感じるものがあつたので記録しておきたい。

玉川大学の卒業生にはブラジルで活躍されている方々が多いが、今回も何人かの方たちと一緒に、中でも大槻洋志郎ご夫妻にはお世話になった。2つの新聞社を紹介していただき、「松香博士来伯」などとプロポリスを中心に、大きな記事になった。

私が代表を務めるプロポリス研究者協会は、ブラジルの会員が少なくない。会議そのものにも参加されておられたのは、私たちのシンポジウムがあつたからではないかと思っているが、会場にブースを出していた3店のうち、2つはPRAの会員であった。店は出さないが、会員になっていただいているミナスジェライス(MG)州のネクター社からは、会議の前にMG州の同社で行われた、蜂針・プロポセラピー国際講習会に招かれることになった。これには同行の日本アピセラピー協会の内藤博士のお世話によるところが大きかった。

その他、以前から知り合いの研究者や、主催のIBRA関係者など、旧交を温めることができた、有り難い機会であった。

参考文献

- 松香光夫. 2004. PRAQ 7(3):6-8.
Sanford, M. T. 2004. Am. Bee J. 144(9): 396-398.